

報告

多文化共生社会の実現に関する研究の 諸問題をめぐって(6)

— 京都外国語大学大学院、卒論ゼミ（日中対照
言語研究）における中国人留学生の指導を中心に —

彭 飛

中国は文化大革命で10年ほど中断された大学入試が1977年に再開され、今年で既に37年目を迎えた。1977年の受験生は570万人、募集数（合格者）はわずかに27万人、ざっと計算すれば合格率は4.7%だった。ところが、2008年になると、打って変わり、募集数（合格者）は600万人にも達した。1977年と比べると、22倍となる計算で、合格率は1977年の4.7%から57%に上がった。まさしく奇跡だ。2014年の受験生は939万人、募集数（合格者）は698万人に達し、合格率は74.33%と更に上がっている。2003年に一部の大学の自主生徒募集が認められ、2014年のデータにはその合格者の数字が含まれていない。大学の合格率は85%以上と見られる。大学が集中している大都会では、大学入学希望者の95%以上がほぼ大学に入ることができる。

80年代からアメリカ、日本を含む海外留学がブームとなった背景には大学受験難があった。しかし経済急成長に伴い、中国の大学が急速に充実したため、わざわざ海外に出かけ、留学しなくともよくなった。現在、来日の中国人留学生層は30年前と全く異なると言える。さらに「一人っ子」で、海外に出たがらない層が増えてきている。とりわけ経済発展の早い都会部の海外留学希望者が減り、中国での大学入試に失敗した人が日本に留学するようになった。本学日本語学科の留学生募集、留学生指導などの対策の見直しが迫られる。

ただし、次の二つの層を見逃してはいけない。親が日本に留学した経験があり、帰国後、創業に成功し、自分の子供を鍛えようと二世を日本に送り込む層で、「留学生二世」と呼ぶ。もう一つの層は在日中国人二世である。8割以上は元留学生の子供で、同じく「留学生二世」である。この二つの層はいずれも母語中国語を生かしながら日本語の通訳もでき、さらに日本の経済・経営にも詳しい「日中通訳と日本の経営」を両方勉強できる、融合した複合学科に入れたい、という親の思いが強い。本学は今後、それらにどう対応するのか課題となる。

一方、大学院の方はまだ安泰状態である。中国の大学院も充実しつつあるが、日本留学希望者は多少減るものの、中国の大学の日本語学科出身なので、一度習った言語の国で研究を深めたい、体験したいという学生がまだ多い。今後10年以内に、院生希望者が減ることはまだ考えにくい。国と国との更なる友好ムードになれば、留学希望者は5倍以上増えると見込まれる。

本学2014年9月に実施した大学院入試合格者のうち、60%は中国人留学生か、在日中国人の二世であった。本学で初めて日本人学生を上回るという現象が起こり、留学生減を心配するよりも、日本人学生減を心配している。その対策を早く講じることも迫られる。

本稿では三つの部分に分け、(1)では2014年度の本学大学院東アジアの「日中対照言語研究」領域の中国人留学生の指導等について、(2)では2014年度の本学日本語学科卒論ゼミ（日中対照言語）の中国人留学生の指導等について報告する。(3)では今年、中国の幾つかの大学の日本語教育の現状について紹介する。

(1) 2014年度の本学大学院東アジアの「日中対照言語研究」領域の中国人留学生指導

次に五項目に分け、2014年度本学大学院東アジアの「日中対照言語研究」領域の中国人留学生指導を中心に報告する。

① 就職率からみる卒業後の進路

本学東アジアの「日中対照言語研究」領域の中国人留学生の卒業後の進路はどうなっているのか。これはどんな人材を育成するにかかわる重要なことである。東アジアの「日中対照言語研究」領域の卒業進路（10年）を追跡すると、博士課程の卒業生（日本人学生を含む）は全員が日本の大学の教師となり、就職率は100%。それぞれの大学で活躍していると聞いている。そのうち1名は今年、准教授に昇進し、2名は本務校で留学生関係の仕事をも兼任している。1名は2015年4月から本学の専任となる。

博士や修士の卒業生のうち、大学の先生や教育機構に就職しているのは32.2%、全国でも高い率を占めている。大手企業に就職しているのは35.5%、丸紅（上海）、ダイキン工業（上海）、トヨタ（長春）、みずほ銀行（大連）、三菱電機（上海）など日系企業や中国の大手企業がほとんどである。また起業・企業家は9.7%を占めている。企業に就職した一部の人は会社を興す準備をしている人もおり、この層は更に増えてくると考えられる。台北在住の周庭旭さん（8年前卒業）は翻訳家として70冊の本を刊行している。そのほか、博物館の学芸員、市役所国際交流室、出版関係、マスコミ関係が12.9%、残りの9.7%は出産や子育てなどである。教師、日系企業、社長、国際交流など、日本語と中国語に関連する多種多様な職業に就いているので、これからの成長が楽しみである。

卒業後、企業の通訳の仕事に従事する層が増えてきたという動きもあり、2014年度、基礎特訓の一環として通訳や翻訳の特訓も加えた。更に日本企業に関連する授業も聴講するよう日本企業就職希望者に勧めている。

② 修士2年生の研究指導と奨学金の授与

今年、修士2年に在籍している中国人留学生は2名でいずれも奨学金を受けている。その獲得率は100%になる、これは10年来初めてのことである。大連出身の黎倩さんは文部省国費留学生（学費免除、月に15万円）になり、本学の国費留学生の第一号となった。吉林出身の王燕燕さんは橋本循記念会の奨学金

(月に10万円)をもらっている。この民間の奨学金は希望者が多く競争が激しい。これまで本学の留学生がもらった報告はない。

黎倩氏の研究課題は【日本語の「強」と中国語の“強”及びそれらを伴う表現の意味的相違の考察 — 「強」を伴う表現の中国語訳／日本語訳の特徴をめぐって—】である。日本語形容詞の「強い」を用いる際に、なぜ中国語に訳すと、中国語形容詞の“強”で対応できないのか、その疑問から生まれた研究である。さらに「強」を伴う中国語と日本語における漢字同形語(強固、強烈、強豪、強化など)の意味的相違、辞書による解釈の問題点についても考察した。これは2年前の孫尚文氏の修士論文【日本語の「大」と中国語の“大”及びそれらを伴う表現の意味的相違の考察】に続く形容詞を中心とする研究である。

王燕燕氏の研究課題は日本語と中国語の漢字同形異義語、とりわけ日本語の「一般」「普通」と中国語の“一般”“普通”の意味的相違に関する研究で、日本語の「一般」「普通」は中国語に訳すと、逆さまとなり、“普通”“一般”となる。なぜこのような言語現象になるのかについて考察した。そのほか、中国語の“把握”(把握)と“掌握”(掌握)、“审判”(審判)と“裁判”(裁判)、“压迫”(压迫)と“压抑”(抑压)も同じ現象が見られ、これらに関しても考察している。

留学生ではないが、巻下由紀子氏の研究は形容詞、漢字同形語にかかわるものである。【きれいに掃除しなさい】は形容動詞+動詞の構造だが、中国語に訳すと【打扫干净】(動詞+形容詞の構造)になる。なぜ中国語の形容詞文には「形容動詞+動詞」構造と「動詞+形容詞」構造の両方があるのか、「安全」「平穩」など中国語と日本語の漢字同形語を中心に解析し、そこから日本語の形容詞と異なる中国語形容詞の特徴を浮き彫りにしている。この研究は中国語学習者だけでなく、日本語学習者にもプラスとなる。

3人の修士論文はいずれも110頁以上完成し、先行研究があまり見られないオリジナル性が強い論文である。

巻下由紀子氏は奈良在住で、英語通訳の経験もあり、海外生活も長く中国語も堪能である。子育て(3人の息子)をしながら修士論文を仕上げた。たくま

しい女性である。卒業後、英語・中国語・日本語3ヵ国語を駆使する仕事がないかと関係部署、関係者にも協力を求めている。まだ子育て中なので在宅勤務の形で、英語・中国語の練習問題を作成する仕事ですでに決まり、今後とも英語・中国語・日本語3ヵ国語を駆使する「輝く女性」も大いに応援する。

③ 研修生の指導、論文博士の指導、授業の工夫

今年の院生の授業は賑やかだった。月曜日と火曜日の院生授業の受講者はいずれも20人近くだった。博士論文提出者の任川海さん（上海外国語大学准教授）、協定校の楊晶晶さん（西安外国語大学教員）のほか、今年は研修生を4人新たに受け入れた。2人は中国の大学で学位をとった大学教員（上海の馬燕菁、寧波の林燕）で、2人は中国の現役の大学院院生（江蘇師範大学院生の馮梅芳、楊淨沙）である。4人とも研究会で数回発表し、本学の在學生にも刺激を与えた。

大学院の授業では論文指導のほか、日本語の基礎特訓の工夫をこらしている。毎回、10分間の基礎テスト、日本の新聞、単語テスト、通訳の特訓なども行っている。今年は初めて宿題として翻訳教材を作成し、また授業での発表の機会も増やし、あの手この手で留学生の日本語のレベルアップを図った。

今年、任川海さんが【日本語と中国語における漢字同形語の意味的相違に関する研究—『日中辞書』『中日辞書』の解釈の問題点及び辞書編纂の諸問題を考えて—】という博士論文（510頁）を提出している。ここ十年、日本語と中国語の対照研究の領域においてレトリック、コミュニケーション、人称代名詞の博士論文は提出されたが、漢字研究は初めてであり、この研究は日中対照研究に欠かせない重要な課題である。任氏は28年間の教育現場での経験を踏まえ、『日中辞書』『中日辞書』の解釈の問題点について100か所以上指摘し、漢字同形語研究の17視点からの考察を行った。ここ数年、任氏のため、毎年の夏、上海のホテルで特訓を行い、初稿を完成した。今年、本人は再度、来日し、朝から晩まで博士論文を練りに練って、原稿完成に全力投球した。

今回は「論文博士」の論文として提出した。通れば本学で外国人留学生によ

る「論文博士」の第一号になる。

④ 見学や交流

日本文化・日本社会の体験として、今年はサントリーの企業見学会を企画した。また「日中対照言語学会」全国大会には院生全員が参加し、よその大学の院生との交流、研究の最新情報を得る貴重な機会となった。

院生同士の交流、留学生と日本人との交流を図るため、桜満開の時期に奈良の観光、京都のお寺の見学を企画した。観光だけではなく、外国観光客に喜ばれる奈良案内のモデルコース、京都案内のモデルコースを作成した。来年度は、その場その場を中国語でどのように紹介するのか特訓する予定である。

【日中対照言語研究会】研究発表会第100回を記念して【天天福】という中華料理で宴会を開いた。30名以上、おいしい家庭的な中華料理に舌鼓を打ちながら、さまざまな交流を行った。今年の忘年会は大阪梅田にある中華料理店【紅虎餃子房】で開き、卒業生ら5名も出席し、賑やかだった。

日本人学生と留学生、先輩と後輩は研究の面においても、生活の面においても助け合い、交流が良好であり、もめ事や不愉快などは一切なかった。

今年は本学で日本人学生による留学生の修士論文の添削手伝いを目的とするテーチンアシスタントが実施される初年度である。日本人学生と留学生との交流にもなり、大好評である。

⑤ 在学院生らの【日中対照言語研究会】での研究発表

2014年度、院生、研修生による【日中対照言語研究会 - 中国語と日本語の相違を考える -】研究発表会は9回、開催された。開催の回数、論文の発表本数(34本)はここ10年においてかなり多かった。日本語と中国語における漢字研究の論文(23本)がトップで全体のおよそ66%を占めている。それに次ぐのは日本語と中国語における動詞研究(5本)、その他の対照研究は形容詞(2本)、人称代名詞(1本)、教授法(2本)、表現(1本)である。

第98回研究発表会 2014年5月12日

- 任川海【中国語の“清潔”“衛生”と日本語の「清潔」「衛生」の意味的相違】
黎倩【日本語の自他動詞の「強まる」「強める」の用い方及び中国語訳の特徴】
傅詩芸【中国語と日本語における「落」を伴う漢字同形語の意味的相違の考察】
卷下由紀子【中国語形容詞の状語的用法の特徴の考察－日本語・中国語における漢字同形語を中心に－】

第99回研究発表会 2014年5月29日

- 卷下由紀子【中国語の形容詞の状語的用法<Ⅱ>の特徴－「光栄」「適当」「安静」「安心」をめぐる－】
王辰麟【日本語と中国語における「行」を伴う漢字同形語の考察－「運行」「行為」「執行」「実行」の意味的相違を中心に－】
趙玉翔【日本語と中国語における「養」を伴う漢字同形語の意味的相違の考察－中国語の“養生”“养成”“养育”“保养”と日本語の「養生」「養成」「養育」「保養」を中心に－】
王燕燕【日本語と中国語の漢字同形語「審判」「裁判」、「圧迫」「抑圧」の考察】

第100回【日中対照言語研究会】記念講演、研究発表会 2014年6月23日

第1部 100回記念講演

由井紀久子先生【日本語ライティング・プロフィシエンシー向上のために】

第2部 記念研究発表

- 楊晶晶【日本語学習者による日本語のあいづち使用の実態調査】
任川海【日中漢字同形語の先行研究に関する検証】
姜紅【多義的感覚形容詞の意味分析モデルによる意味記述の実践】

第101回研究発表会 2014年7月28日

山崎綺香【「預かる」「預ける」、「授かる」「授ける」、「教わる」「教える」の
方向性をめぐって】

黎 倩【日本語の「弱い」及び「弱」を伴う表現の考察】

卷下由紀子【状語的用法および補語的用法を併せ持つ中国語形容詞の日本語
の漢字同形語との比較 — 「自然」「深刻」「正確」をめぐって—】

任川海【日本語と中国語の漢字同形語の意味的相違】

第102回研究発表会 2014年10月9日

卷下由紀子【中国語形容詞の状語的用法と補語的用法の特徴】

王燕燕【中国語と日本語の漢字同形語の研究にかかわる諸問題〈I〉】

黎 倩【日本語の「強」と中国語の“強”及びそれらを伴う表現の意味的相
違の考察にかかわる諸問題】

任川海【日本語と中国語における漢字同形語の研究にかかわる諸問題】

第103回研究発表会 2014年10月27日

馮梅芳【日本語の外来語と在来語（和語・漢語）における類義語の意味的相
違及び中国語訳の特徴の考察— 「ラスト/最後」、「ライン/線」を中
心に—】

趙玉翔【中国語の“生育”“发育”“哺育”と日本語の「生育」「发育」「哺育」
の意味的相違の考察】

傅詩芸【日本語と中国語における「脱落」「落差」の意味的相違の考察】

王燕燕【中国語と日本語の漢字同形語の研究にかかわる諸問題〈II〉】

第104回研究発表会 2014年11月25日

山崎綺香【日本語の「アタル」と「ブツカル」の意味的相違の考察】

覃子恩【日本語の「取る」及び「取り+動詞」複合語の中国語訳の考察】

馮梅芳【外来語の「ラスト」と漢語の「最後」の意味的相違及び中国語訳の

特徴の考察を中心に】

黎 倩【日本語の「強」と中国語の“強”及びそれらを伴う表現の意味的相違の考察にかかわる諸問題(2)をめぐって】

第105回研究発表会 2014年12月16日

馬燕菁【日本語における人称代名詞の連体修飾について - 指示詞「コノ」類を中心に-】

楊晶晶【中国の大学における日本語翻訳・通訳授業の教授法 - 過去20年間の先行研究を通して-】

楊浄沙【日本語の「～化」を伴う表現の中国語訳の特徴(1) - 「深刻化」「問題化」「差別化」を中心に-】

第106回研究発表会 2015年1月27日

林 燕【日本語の「事件が起きる」と「事件が起こる」の使い分けの考察】

楊浄沙【日本語の「～化」を伴う表現の中国語訳の特徴(2) - 日本語独特の「～化」を伴う表現を中心に-】

王辰麟【日本語の「行い」「振り舞い」の用い方の特徴及び中国語訳の考察 - 日本語と中国語の「行」を伴う漢字同形語の意味的相違-】

日本語と中国語における漢字研究は本領域の研究の特色の一つとなっている。そのほか、動詞、形容詞、レトリック、コミュニケーション、人称代名詞などの対照研究も活発である。研究発表者のうち、9月大学院入試に合格した学生、またこれから入試準備中の受験生もチャレンジしている。

また日中対照言語のゼミ生も聴講し、卒論作成にもプラスとなり、研究の刺激となっている。聴講者には本学の学生のほか、外部からの聴講者も増えている。

(2) 2014年度の本学日本語学科卒論ゼミ（日中対照言語）の 中国人留学生の指導

今年の卒論ゼミ（日中対照言語）の学生は12名、無事に卒業論文を完成している。が、指導は大変だった。日本語の基礎が弱い、作文能力が弱い。中国語でも3頁以上の文章を書いたこともないのに、日本語で20頁以上書けるのか不安だった。院生の部屋で、授業以外に少なくとも10倍以上の時間をかけて、手取り足取り、マンツーマンで指導した。卒論を完成した留学生は院生の部屋で記念撮影までし、完成後の感動も大きい。大学4年のいい思い出となったであろう。12名の卒論のテーマは以下の通りである。

鄒心如【日本語の「しっかり/しっかりする」の用い方の特徴及び中国語訳の特徴の考察】

韓玉婕【日本語と中国語における「下」及び「下」を伴う表現の用い方の特徴に関する研究－「下級」「下流」など漢字同形異義語及び「下見」「下準備」など日本語的な表現の中国語訳の考察を中心に－】

趙 婷【日本語と中国語における「目」「足」及びそれらを伴う表現の意味的相違の考察】

趙 斌【日本語の「気」を伴う表現の用い方の特徴の考察－「気」を伴う表現の中国語訳を考えて－】

潘一玮【日本語と中国語の色彩語における「赤」と「紅」、「青」と「緑」「藍」の意味的相違の考察】

成格尔【日本語の「先」及び「先」を伴う表現の用い方の特徴に関する考察－「先」を伴う表現の中国語訳の諸問題を中心に－】

姜 豊【中国語と日本語における「接」を伴う漢字同形語の意味的相違に関する研究－日本語の「接」を伴う表現の用い方及び中国語訳の特徴の考察を中心に－】

李成志【中国語独特の“开”（13用法）における日本語訳の特徴の考察－中国語の“开”と日本語の「開」を伴う漢字同形語の相違を考えて－】

楊 薇【日本語と中国語における「結」を伴う表現の用い方及び翻訳上の諸問題の考察】

本石勝尚【日本語と中国語の「打」、「打」を伴う表現の用い方の特徴及び翻訳の諸問題の考察】

王亭雅【日本語と中国語における「心」を伴う漢字同形語の意味的相違の考察 —日本語の「心」を伴う表現の中国語訳の諸問題をめぐって—】

曹沅雪【日本語の「手」を伴う表現の用い方及び中国語訳の特徴の考察 —「手先」「先手」「手下」「下手」「手際」「手腕」「手数」「手間」「手荷物」「手弁当」「手厳しい」「手早い」「手渡す」「手放す」「手書き」「手抜き」を中心に—】

いずれも外国人学習者に難解だと思われるテーマを中心に論文作成にとりかかった。いろいろな発想、異なる着眼点、面白い卒業論文を仕上げた。そのほか、授業での翻訳の特訓、また院生との交流など、さまざまな手法を工夫した。ゼミ生同士のコミュニケーションを図るため、二回ほど懇親会を開いた。論文初稿を完成した後、中間発表会を5回ほど開いた。

(3) 中国の大学院・大学との研究連携

今年8月末から9月中旬まで蘭州、広州、上海などの大学をまわった。大学の日本語学部（日本学科）をどのように支援していくのか、研究ネットワークをどのように構築するのか、近年の課題となっている。

日中関係の悪化により、日本語学部・日本語学科が規模縮小の傾向にあり、わずか2年間で、学生数が30%ほど減っている。政治的影響で日本語専攻から他の学部（学科）に転向しようとする学生が増え、日本語学科の教員たちはずいぶん苦勞して説得にあたっている。大学だけでなく、民間の語学学校も日本語学習者が半減している。

【2+2】（2年は中国の大学で勉強し、2年は日本で勉強する）、【3+1】（3年は中国の大学で勉強し、1年は日本で勉強する）という日本体験留学の制度を実施している大学は思ったより多く、今回回った大学で80%ほどの大学

がこの制度を設けている。一部は日本の大学と連携しているが、一部は日本の短期大学、日本語学校と連携して実施している。この教育市場が大きく、本学も一日も早くその受け皿を整備してほしい。

各大学で共同研究、大学院の授業の設定、指導方法、中国人学生の体験型の日本短期留学の在り方について、更に教科書の共同編集、辞書の共同編纂などについても幅広く意見交換を行った。

今回、もう一つ印象に残ったのは卒業生への支援、アフタサービスである。9月12日午後と夜、母校・復旦大学を訪問し、校友会や卒業生とも交流した。当日、復旦大学主催の【復旦の星】（創業コンクール決勝大会）に出席し、12名の卒業生（起業家）のプランの発表、専門家や教授のコメントを聞いた。出席者100名の投資家（卒業生）がそれぞれのプランを聞いて自分の投資額を決める。

なかなか刺激になるイベントで、不景気打開の人材育成の課題を抱えている日本の大学も学ぶべき、どんどん在学学生や卒業生に刺激を与え、ハングリー精神をもつ人材育成策を練る必要があるのではないかと考えさせられた。